

株式会社FOREST WORKER代表 田村栄太さんに聞く

社会課題の解決とイノベーションをもたらす 木材トレーサビリティプロジェクト 「HIBA RINGs」

2015年に創設された「ウッドデザイン賞」(主催 一般社団法人日本ウッドデザイン協会)。木を使って様々な社会課題を解決する、優れたデザインの建築・空間、プロダクト、活動や研究を表彰し、広く社会へ発信する顕彰制度です。その「ウッドデザイン賞2024」にて木材トレーサビリティプロジェクト「HIBA RINGs」が、「優秀賞」を受賞しました。評価されたのは、社会課題の複合的な解決をもたらし、イノベーション・新産業創出に寄与する点です。

新緑が眩しい季節となり、木や森という自然に触れる機会も増えます。この機に、大切な資源としての木の利用について考えてみるのはいかがでしょうか。「HIBA RINGs」を立ち上げた株式会社FOREST WORKER代表取締役社長の田村栄太さんにお話を伺いました。



「HIBA RINGs」の一員
(株) FOREST WORKERの田村栄太さん



木材トレーサビリティプロジェクト「HIBA RINGs」の製品



トレーサビリティとは、いつどこで誰が作って、どう加工されてどんな流通システムを経てきたのか、そして廃棄まで追跡可能な状態にすることです。これによって、昨今求められている品質向上や安全対応、環境配慮の商品づくりに対応できます。結果的に利益増にもつながります。これまでは主に食品について重要視されてきました。2013年のバングラデシュの縫製工場が入ったビル「ラナ・プラザ」の崩落事故以来、ファッション業界においても、サプライチェーンの可視化が叫ばれています。

林業界でも森林伐採や森林機能の劣化が、気候変動と生物多様性の損失に大きく関わっているという指摘があり、木材となる木が育った山林が適切に管理され森林保護に寄与しているか、労働安全・強制労働・先住民の権利など人権に関連する法令を遵守しているかという、調達における“木材デューデリジェンス”が企業に求められるようになりました。そのためには、その製品がいつ・どこで・誰によって作られたのかを明らかにする木材トレーサビ

リティが欠かせません。

きっかけは林業界の課題から

消費者にとって安心・安全が保障されているという点でメリットが大きいトレーサビリティですが、木材トレーサビリティプロジェクトの「HIBA RINGs」が始まったのは、消費者側でなく生産者側の想いからです。

株式会社FOREST WORKER代表取締役社長の田村栄太さんは、自分たちが伐った木がどこへ行って、誰がどんなふうに使っているのかわからないことに疑問を感じていたといいます。

「実際に木材市場に行って愕然としたんです。そこらじゅうに山のように材が積んであって、自分たちが伐った木がどこにあるかわからない。必死で探してやっとみつけました。でもその先、何に使われているのかまではわからないんです」

現在の林業の仕組みでは、伐られた木は地元の木材市場に集められてセリにかけられ、買い付けた業者へ出荷され、加工業者にまわり、様々な流通を経て消費者のもとにやってきます。これでは生産者と消費者の距離が遠いので、顔が見える仕組みが作れないだろうか、直接販売することができないかと考えたそうです。

とはいっても、会社の事業の中心は、造林・育林業で間伐が中心です。木材加工の技術や経験はなく、販路もありません。そんなとき、JR西日本主催の『てみてプロジェクト』に参加する機会に恵まれます。このプロジェクトは観光や産業振興、駅の再開発など、地域の価値を高めていくことを目的として、これまで観光列車の運行や商品開発などを中心に行っていました。田村さんがそこで自分の想いを話したところ、デザイナーと意気投合。物のルーツがわかり、エンドユーザーと生産者をつなげる木材商品を作って販売しようと「HIBA RINGs」を立ち上げることになりました。

「ふだん使っている木の椅子があったとして、その木はどこからきているのかわかったらもっと愛着が湧いてくると思いませんか。使っている人にとっても、樹木のルーツが辿れたらいいねという話になったんです」と説明します。

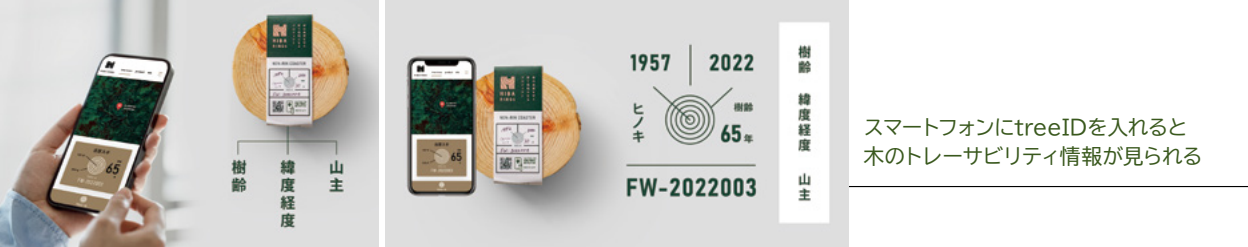
きっかけは、林業×木工×デザインを主とする3社の出会いからです。林業に従事する株式会社FOREST WORKERと、木工品



ウッドデザイン賞2024の授賞式の様子



ひろしまグッドデザイン賞展示



製造を行う舩元木工株式会社、デザイン会社の千差株式会社で、この3社がそれぞれのスキルを発揮することで、一つの形になりました。

製品という形になることで、林業従事者にとっても、自分たちが手掛けた木材への愛情と仕事への誇りを実感できるようになっているといいます。

独自の木材トレーサビリティシステムを開発

山に生えている木が製品になるまでには、とても多くの工程があります。専門性が異なるたくさんのプロが関わっているといえば聞こえはいいですが、「不透明」ともいえます。

では、今まで距離が遠かった林業者と消費者をどうつなげるのでしょうか。「HIBA RINGs」の商品ラインナップは、間伐材で作ったブックエンド、コースター、丸太のスツールなどで、一見、変わった様子はありません。ポイントは、QRコードです。商品タグや帯に付いているQRコードをスマートフォンで読み込み、「treeID」を入力すると、①植えられた年（樹齢）②育ったピンポイントの場所 ③山の持ち主（まれに記載がない場合もある）④伐採した人がわかるように設定しているので、木の歩みや歴史を調べることができます。

「独自でトレーサビリティの仕組みを開発しました。すべての商品にIDを付けて販売しています。例えば、手にしたコースターの木が立っていた場所が地図上で示され、切り株の写真が情報として出てきたりするのですが、木材の背景を知るのと知らないのとでは、物を大切に思う気持ちが違いますよね」と田村さんはいいます。

「ここで生きていたんだ」と伝えることによって、森の恵みである木材を大切に使うと同時に、「この人が伐採したんだ」とわかることで、現在の森林が抱える課題について、消費者にも目を向けてほしいといいます。

木材トレーサビリティに取り組んでいる業者は、数は少ないですが他にもあります。しかし、建築材となる輸入材を扱う大手企業がほとんどで、加工業者や伐採業者まではわかっても、誰の山で、誰が伐ったのかまでの記録はなく、辿れません。それを思うと、田村さんたちの開発したシステムはとても画期的ですが、商標登録をするつもりはないそうです。

「真似しようと思えばできるものなので、どんどん真似してほしい。消費者が木材をただの材料ではなく、一緒に生活する存在感の高い物として感じれば、一緒に森の未来を考えてくれる仲間になってくれます。そのためには、もっと多くの人の目に触れてほしいと願っていますし、実際、多くの大手企業からノウハウを知りたいという問い合わせが増えています」

森の課題から森の未来を考える

現在、田村さんは広島県庄原市で、造林・育林事業、ツリーケアサービス、山林経営管理

を行う会社を運営していますが、前職は森林組合の職員でした。約8年間従事して、独立し会社を立ち上げます。独立当初は、森林組合から下請けの仕事をもって「バリバリ働いていた」という田村さん。

「目をギラギラさせて稼いでやるぞと意気込んで、森林組合にいたときの3倍のペースで働き、木を伐りまくっていました」

しかし、独立して2、3年が経ち、体もボロボロになってきて、この先もこんなハードな肉体労働を続けられるか不安になっていきます。一体なんのために独立したのかという自問自答の中で、出合ったのが「自伐型林業」でした。環境に配慮した林業方法で、山を丸裸にするような伐採を中心にするのではなく、樹齢100年以上になる木を育て、持続可能な森を育成していくことを目標にしています。

「どこかで、木を伐るだけでいいのかな。これが林業なのかなって思っていました。伐った後の森のことが見えていなかったんですね」

現在、森林伐採による深刻な環境破壊が問題になっています。木材の商品を買うとき、その商品が適切な間伐によって生まれた材なのかどうかかわければ、むやみな森林破壊を食い止めることにつながります。また、これまでのやり方では、間伐材は安いからと山に放置していることが多々ありましたが、一本一本の間伐材の価値を高めていけば、山に放置されている材も減らせます。

「現場の人間なので、林業の担い手が足りないこと、木材価格の低下、それらが影響して山林が疲弊していることを肌で感じています。林業界の現状を、買う側の人が知り、山に興味を持ってくれたら、この状況も変えられると思います。そういった意味でも、消費者の意識と生産者をつなぐ、この木材トレーサビリティは今後、もっと重要になると思います」

国産の木材の利用を国が推し進める「木づかい運動」。木材の消費を拡大し、国産材を暮らしの中に取り入れるという動きです。この先、木材トレーサビリティが進めば、その木はどういう方法で育てられ、どんな機械で伐られ、どう運ばれ、どこでどんな加工がされたのか、温室効果ガスの排出量はどうかと、森の未来を考えて消費をする人が増えていくでしょう。

林業と人々をつなぎ、木材に付加価値をつける。そして、林業も地球環境も持続可能なものにしていく。この先も、田村さんたちの模索は続きます。



丸太切りや年輪磨きなどのワークショップを通して木に親しむ機会を作り、森林の未来を考えてもらうきっかけづくりをしている



FOREST WORKERが整備した山。移動や木材運搬用に必要な作業道についても、山を壊さないように気を配って作っているのが特徴